Case 1 【北海道北広島市】

「農福連携」を目指して新規就農

団体概要

団体名	合同会社　竹内農園				
事業所名 農園名	竹内農園				
事業内容	農業（スイートコーン　ピーマン　長ネギ　玉ねぎ　トマト類など）				
農福連携の方法	ワークサポートサンスマイル（就労継続支援Ｂ型事業所）に農作業を委託				
従業員	６人	身体	知的	精神	その他
	うち障がい者数４人	０人	０人	４人	０人
障がい者の勤務形態	時間	平日 10 時 00 分から 15 時 00 分			
	期間	通年			

取り組み概要（事業内容・きっかけ）

【事業内容】

合同会社竹内農園の代表である竹内氏は、道内の大学を卒業後、大手機械メーカーに就職し、経理関係の仕事でインドでの勤務を経験した。在職中、インドで適材適所の働き方を学んだことを生かし、北海道を元気にするため「福祉とともに営む農業」をやりたいと考えるようになった。2007 年に機械メーカーを退職後、農作業支援員として知的障がい者施設で勤務、農業生産法人の研修を経て 2013 年に合同会社竹内農園を設立し、新規就農した。同じころ、近隣に所在する福祉施設と連携することを考え、就労継続支援 B 型事業所「ワークサポートサンスマイル」に協力を求め、障がい者とともに畑の敷地にビニールハウスを建てた。このことが契機となり、2014 年 2 月にワークサポートサンスマイルと農作業の委託契約を結び、現在障がい者とともに農業を行っている。

竹内農園は、北広島市の南東、恵庭市との境界付近にあり、主に野菜類を栽培している。ビニールハウスでは葉物野菜やミニトマトなど、露地では長ネギ、玉ねぎ、調理用トマトなどを栽培している。2014 年からコープさっぽろや地元のスーパーなどと取引を始め、すべての収穫物について、JA を通さず、独自の販路で出荷している。冬期間は、ハウス内で三つ葉の栽培を行うことで、通年の作業委託を実現している。

ワークサポートサンスマイルは、竹内農園から車で約 5 分、国道 36 号線沿いにある定員 20 名の障がい福祉サービス事業所で、主に精神障がい者を受け入れている。2013 年 5 月に事業所を開設し、現在 15 名の障がい者が登録している。竹内農園の農作業には、障がい者 4 名が参加しており、支援員、指導員が同行している。

【きっかけ】

竹内氏は、大手機械メーカーの社員としてインドに赴任し、「適材適所」の働き方を学んだことと、北海道に帰省した際、北海道のまちが寂しいものに感じられたことを現在の活動の動機としてあげている。元気な北海道を実現する方法として「福祉と共に営む農業」を志し、新規就農と同時に障がい福祉サービス事業所に協力を求めた結果、ワークサポートサンスマイルと連携できたことが、農福連携の直接のきっかけとなっている。

取り組みのポイント

○新規就農をした時から障がい者が働くことを想定して、作物の選定を行っている。

○障がい者にも使用可能な手動式の機械を導入し、作業の簡素化を図っている。

○独自の出荷ルートを開拓し、出荷に伴う障がい者の仕事づくりを行っている。

障がい者が担う仕事について

障がい者が担う仕事内容	仕事をする上での工夫点
・畑への種まき（トラクターなどを使用せず、手動式の種まき機を使用する） ・簡易な板を使用した紙ポットへの種まき ・肥料まき（手作業、機械作業） ・支柱立て（支柱を地面に刺し、固定する） ・草取り（手作業など） ・脇芽掻き･下葉掻き（トマトなどの脇芽と下葉を取る） ・収穫、選果、出荷前作業 ・計量（収穫物を一定の重さにするため重量を計る） ・袋詰め･バーコード貼り	・機械を導入する際、できる限り仕組みが簡単で、初心者にも扱いやすいものを選んでいる。 ・種まきの際、トラクターを使用せず、手動式種まき機を使用して、障がい者の仕事を作っている。 ・出荷準備の際、重量を計る、袋に入れる、封をする、バーコードを貼る、というように作業を分割してシンプルにしている。 ・自ら出荷先を開拓することで、自分の裁量が増え、障がい者の仕事を増やしている。 ・危険な作業や経営的な判断を要する仕事は、竹内農園が行っている。

【作業の様子】

写真１　長ネギの葉切り（出荷前作業）

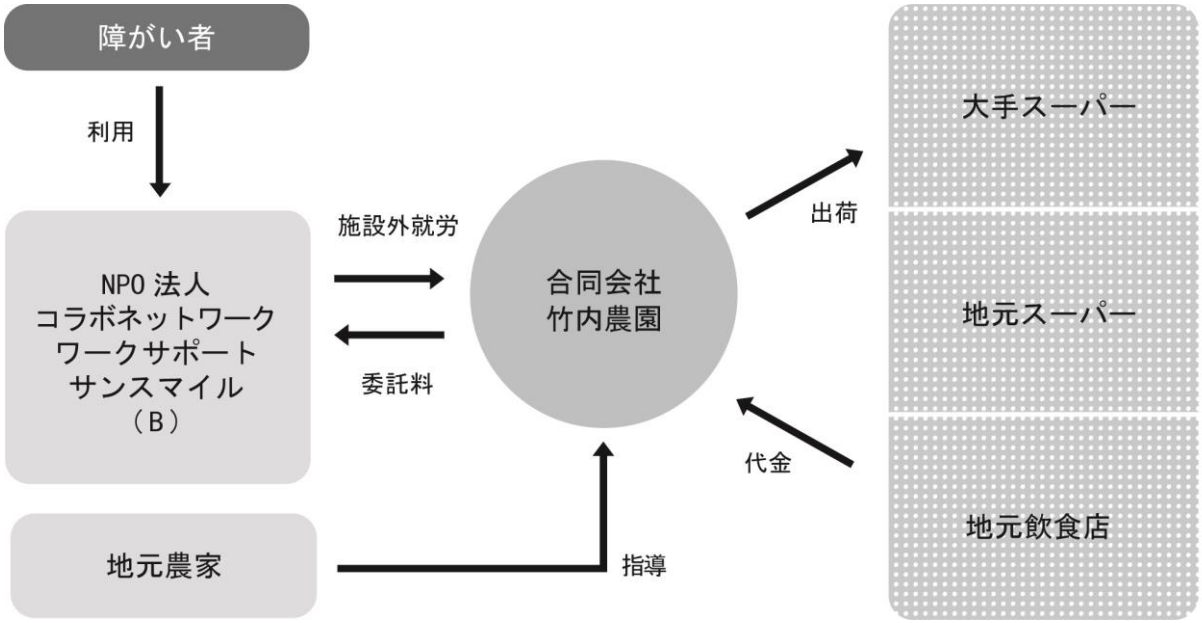
写真２　玉ねぎの選果作業

写真３　ミニトマトの出荷作業

農業に従事したことによって見られた変化

障がい者：よく眠ることができるようになり、服薬を減らすことができた。
　　：皆と一緒に汗をかくことで、孤独感がなくなり、作物を育てる喜びや楽しさを感じることができた。
従業員：障がいに合わせた工夫をすることで、農業知識のない従業員にもわかりやすい作業工程となった。
　　：仕事の進め方や割り振りについて、よく考えるようになった。
経営面：農業技術の不足が、障がい者の人数でカバーされた。
　　：袋詰め作業など、障がい者に任せることができる作業が増え、その分農場全体に気を配ることができた。

事業スキーム



Case 2

【北海道十勝芽室町】

道外の食品会社と町が連携して、地域に障がい者の就労の場を創出

団体概要

団体名	株式会社 九神ファームめむろ				
事業所名	九神ファームめむろ（就労継続支援 A 型）				
事業内容	農業生産（カボチャ、ジャガイモ、小豆） 農作物の一次処理加工				
農福連携の方法	法人が運営する農場・加工施設での就労				
従業員	17 人 うち障がい者数 13 人	身体	知的	精神	その他
		1 人 重度	9 人 うち重度 5 人	3 人	0 人
障がい者の勤務形態	時間	6 時間 30 分/日 9 時 30 分から 17 時 00 分 （シフト制）			
	期間	農 作 業：3 月～12 月 加工作業：通年			

取り組み概要（事業内容・きっかけ）

【事業内容】

株式会社九神ファームめむろは、道外の食品会社 3 社が共同出資して設立した就労継続支援 A 型事業所である。芽室町にある 3 ヘクタールの農場を借り上げ、ジャガイモ、カボチャ、小豆を生産している。農業経験者を従業員として採用し、障がい者に農作業の指導をしている。採用した従業員は、障がい者福祉に関する知識はないものの、農作業と真剣に向き合う姿勢を見せたり、作業内容の伝え方を工夫したりすることで、作業効率の向上を図っている。こうした毎日の試行錯誤により、障がい者の農作業に対する理解を進めている。なお、指導にあたる従業員のうち 2 名は 65 歳以上の高齢者である。また、農場で使用しているトラクターやハーベスターなどの機械や収穫した農作物を収納するための倉庫は、地元の農家にリース料を支払って借りている。

農場から車で約 15 分の所に、事務所と加工作業場がある。加工作業場では、農場で生産した農作物の皮むきやカット、加熱処理などの一次処理加工を行っている。加工品は、出資企業に出荷され、ポテトサラダやコロッケなどの原料として使用されている。

九神ファームめむろでは、全国の特別支援学校の修学旅行生を受け入れ、農場近隣にある宿舎と連携し、宿泊しながら就農体験や加工体験ができる観光事業の取り組みをしている。

町や出資企業などと情報交換を積極的に行っているため、事業が円滑に進んでいる。

【きっかけ】

芽室町は、2012 年当時、町内で生活する知的・精神障がい者約 240 人のうち、約 30 人しか働いていなかった。障がい者の就労率が低いという問題を解消するため、町は、地方公共団体などに障がい者就労の支援をしている企業と連携し、就労参画プロジェクト「プロジェクトめむろ」を立案した。このプロジェクトにより、道外の食品会社 3 社が出資して障がい者雇用の場として株式会社九神ファームめむろを設立した。

取り組みのポイント

○行政と民間企業が協力して、運営体制を構築している。

○全国の特別支援学校の修学旅行生を受け入れ、農業体験や加工体験ができる観光事業の取り組みを実践している。

障がい者が担う仕事について

障がい者が担う仕事内容	仕事をする上での工夫点
・草刈り、定植、マルチ掛け（畝にビニールを張る） ・種まき、施肥（プランターに乗って小豆の種まき） ・選別、収穫作業 ・カボチャの間引き、整枝、摘心（カボチャの芽を摘みとる）、玉直し ・農作物の皮むき、カット、真空パック詰め作業、加熱処理 ・農作物の梱包	・農業経験のある従業員が、障がい者に農作業の指導をしている。 ・障がい者に、「できる作業だけをやればいい」のではなく、「お客様を満足させなければならない」と伝え、目の前の仕事に真剣に向き合うように指導している。 ・トラクターなどの機械や収穫した農作物を収納する倉庫は地元の農家からリース料を支払い借りている。 ・加工作業は、従業員２名が現場につき、障がい者全体の動きを見るなどのサポートをしている。

【作業の様子】

写真１　ジャガイモの種まき

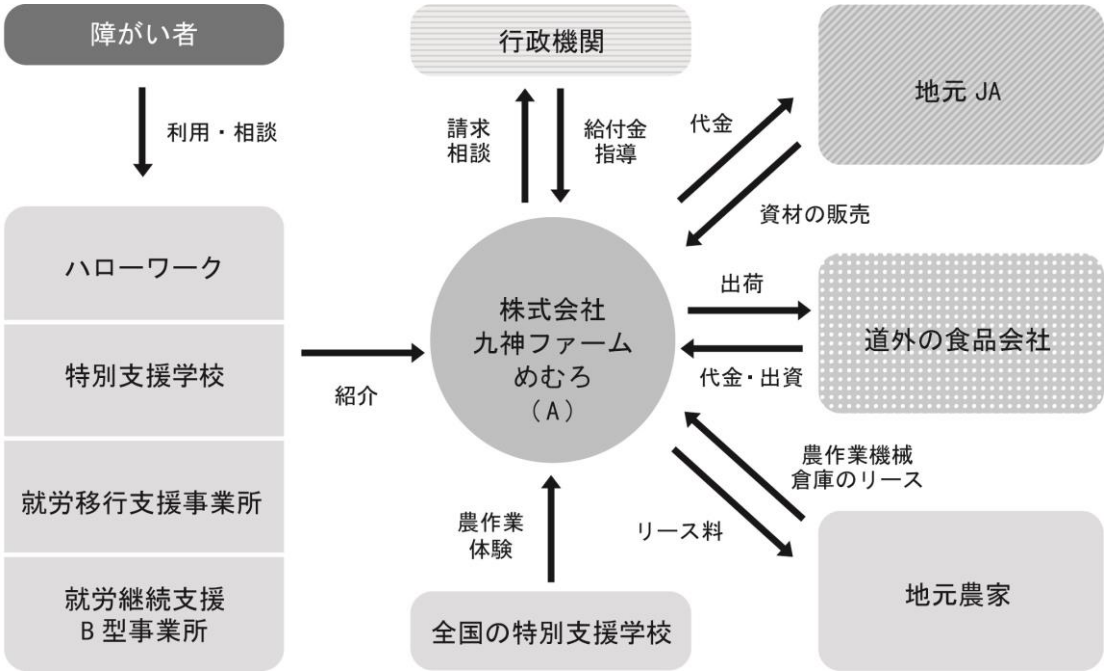
写真２　機械を使った小豆の種まき

写真３　加工作業の様子

農業に従事したことによって見られた変化

障がい者：性格が明るくなり、よくコミュニケーションを図るようになった。
　　：繁忙期、自ら残業や休日出勤を申し出るようになった。
　　：自分が必要とされていると感じ、仕事に対する責任感を持つようになった。
従業員：仕事内容をどう具体的に伝えるのか試行錯誤することで、コミュニケーション能力が向上した。
　　：障がい者が働いてくれることで、従業員の性格が穏やかになった。
経営面：農業生産だけでなく、一次処理加工を行う事により、商品の付加価値を高めている。

事業スキーム



Case 3 【北海道石狩市】

障がい者の働く場として運営する本格的なシイタケ栽培

団体概要

団体名	社会福祉法人　はるにれの里				
事業所名	ふれあいきのこ村（就労継続支援B型、生活介護）、東米里菌床センター（就労継続支援A型）とれたってマルシェ（就労継続支援A型）				
事業内容	シイタケ栽培、菌床生産、生薬栽培				
農福連携の方法	法人が運営するシイタケ栽培施設での就労、および農業生産法人から農作業受託				
従業員	73人	身体	知的	精神	その他
	うち障がい者数50人	2人	43人	5人	0人
障がい者の勤務形態	時間	きのこ村、菌床センター ：9時から16時　4週8休 マルシェ ：9時から16時　農繁期4週6休、農閑期4週10休			
	期間	通年			

取り組み概要（事業内容・きっかけ）

【事業内容】

「社会福祉法人はるにれの里」は1986年に「札幌市自閉症児・者父母の会」によって設立された社会福祉法人である。現在では石狩市、札幌市、合わせて24の事業所、29のケアホームを展開し、障がい者支援を行っている。

「ふれあいきのこ村」は、同法人が2003年に設立し運営を開始した就労継続支援B型と生活介護をサービス内容とする多機能型事業所であり、菌床シイタケ栽培を行っている。栽培施設近くにあるゴミ処理施設で発生する熱源を利用して栽培施設内の温度管理を行っている点が特徴的である。現在では、「北海道きのこ消費・生産振興会」主催の品評会で入賞を果たすほどの高品質のシイタケを一日平均200kg～250kg生産し、大手スーパーなどの量販店に出荷している。

「東米里菌床センター」は同法人が2007年に設立、運営を開始した就労継続支援A型事業所で、菌床培地の生産を行っている。ふれあいきのこ村開設当初は菌床を外部から購入してシイタケの栽培を行っていたが、同センター開設により、法人内で菌床の生産が可能となり、シイタケの生産量向上、安定的な収益が確保できるようになった。また、生産される菌床は札幌市内の社会福祉法人にも出荷している。

また、近年新たに開設した事業所の「とれたってマルシェ」は大手製薬会社と連携して生薬栽培を行う「農業生産法人てみるファーム」で施設外就労を行っている。

【きっかけ】

2000年、はるにれの里が、厚田村（現、石狩市）にグループホームを開設する計画が立てられた。しかし、障がい者を新たに雇用してくれる場所が無く、グループホームに入所する障がい者が一般企業に就労することは難しい状態であった。そのため、障がい者に新たな働く場所を提供する計画を並行して進めることとなった。仕事を決めるにあたり、障がい者の保護者から、菌床シイタケ栽培を行う提案があり、はるにれの里はこれを行うことを決め、農福連携への取り組みを開始した。

取り組みのポイント

○ふれあいきのこ村はサービス内容で工賃の差を設けず仕事量に応じた支払いをしている。

○障がい者の工賃上昇のため、積極的な営業活動をして販路拡大に努めている。

○障がい者と職員が一体となって試行錯誤を繰り返すことで作業の効率化を図っている。

障がい者が担う仕事について

障がい者が担う仕事内容	仕事をする上での工夫点
・菌床生産：おがくず運搬、培地材料作成、培地運搬 接種作業 ・ｼｲﾀｹ生産：浸水作業、水揚げ作業、培地運搬、培地を並べる、収穫作業、ハウス清掃 ・出荷作業：段ボールづくり、計量作業、 エアダスターを用いてゴミ飛ばし、 パッケージング、シール張り、 段ボール詰め、納品ラベルの貼り付け、 ・生薬栽培：土づくり、種まき、草取り、水やり、 間引き、収穫	・障がいの程度に関わらず、各障がい者が何かしらの作業が行えるように、工程を細かく分解している。 ・障がい者の個性をしっかりと理解した上で、適した作業を行ってもらえるよう努めている。 ・コミュニケーションが苦手な障がい者同士が同じ仕事場で作業を行わないよう、人員配置について細心の注意を払っている。 ・障がい者が操作しやすいパック機を選んでいる。 ・培地を置く箇所に予め印をつけておき、障がい者が培地を並べやすいようにしている。 ・収穫は判断が得意な障がい者にのみやってもらう。

【作業の様子】

写真１　収穫作業

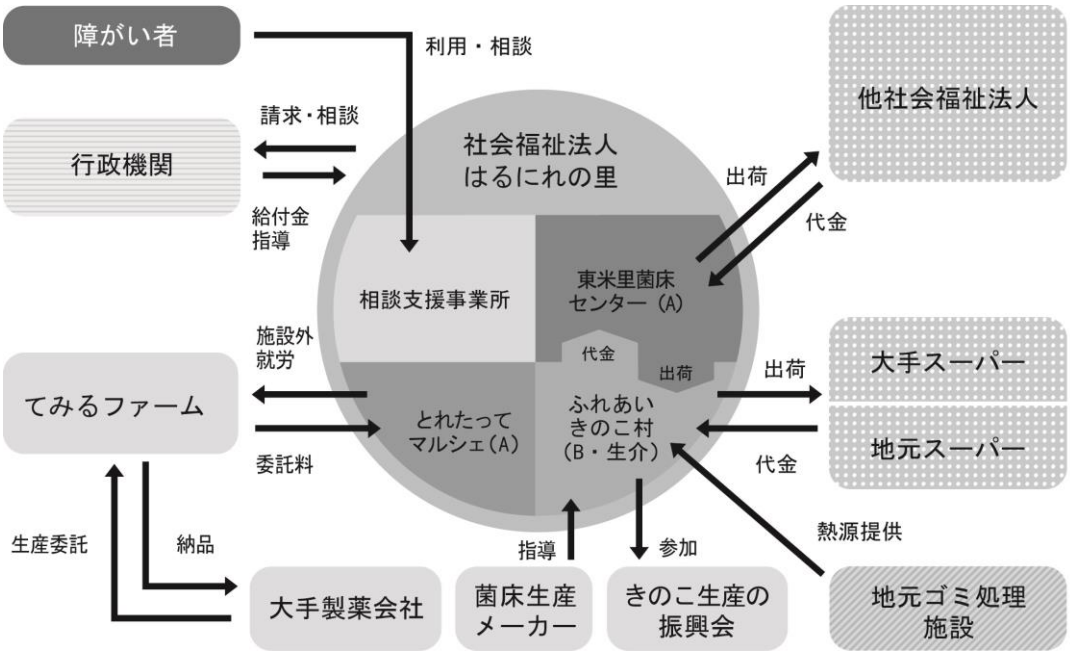
写真２　培地運搬作業

写真３　パック詰め作業

農業に従事したことによって見られた変化

障がい者：日々同じ作業を繰り返し行っていった結果、長く在籍している障がい者はこなせる仕事量が増えていった。
　　：農作業を通じて、障がい者が一つの物事を継続して行える根気が身についた。
従業員：従業員の農業に関する知識を高めることができ、スキルアップにつながった。
　　：農作業を通じて障がい者の新たな個性がわかり、きめ細やかなサポートができるようになった。
経営面：販路拡大に伴って収益が上向いていき、障がい者に高い工賃を支払うことができるようになった。
　　：生産工程を全て法人内で行うことによって生産性が向上し売上が上昇した。

事業スキーム



Case 4

【北海道帯広市】

畜産農家が障がい者とともに養鶏を開始し、その後福祉事業に参入

団体概要

団体名	有限会社くさなぎ農園				
事業所名 農園名	くさなぎ農園 （就労継続支援 A 型･就労移行支援事業所）				
事業内容	畜産（養鶏、養豚）				
農福連携の方法	法人が運営する農場で就労 および近隣農家の農作業支援				
従業員	15 人	身体	知的	精神	その他
	うち障がい者数 7 人	0 人	7 人	0 人	0 人
障がい者の勤務形態	時間	7 時 00 分から 17 時 00 分 （変則シフト制）			
	期間	通年			

取り組み概要（事業内容・きっかけ）

【事業内容】

有限会社くさなぎ農園の代表である草薙氏は、帯広畜産大学を卒業後、有珠郡壮瞥町に所在する福祉農場での実習などを経て帯広市清水町に新規就農した畜産農家である。就農後間もなく、知的障がい者 1 名を受け入れ、草薙夫妻と 3 人で共同生活を営みながら、養鶏場を立ち上げた。新規就農から 5 年後、現在の帯広市八千代町に移転し、特別支援学校と連携を図りながら、同校のインターンシップ（職場実習）受け入れや、卒業生の一般雇用など、障がい者との結びつきを強めていった。農園の規模を拡大していく中で、「有限会社くさなぎ農園」を設立、障がい者雇用の場を広げるため、就労継続支援 A 型事業所を開設した。さらに、農園は帯広市内から車で約 45 分かかり、通所に時間がかかることから、障がい者の生活の場としてグループホーム「みんなのいえ」を開設し、障がい者の生活と仕事の両方を支える体制を整えた。福祉事業所開設の翌年から養豚業を開始し、その後就労訓練を希望する障がい者のニーズに答える形で、就労移行支援事業所を開設し、現在に至っている。

くさなぎ農園は、帯広市の南西部に所在する大規模畑作地帯にある。農園では、約 3,000 羽の鶏と約 30 頭の黒豚を飼育しており、それぞれに必要な飼料も同所で製造している。農園の作業は、就労継続支援 A 型事業所の障がい者と就労移行支援事業所の障がい者、及びそれぞれの従業員で行われ、農繁期には近隣農家での施設外支援も行っている。養鶏業、養豚業、飼料製造業という多様な業務の中から、障がい者の適性を配慮して仕事を分担する方法で、高品質な卵と豚肉の生産を行っている。また、地域の行事などに障がい者が積極的に参加し、近隣中学校の職場見学を受け入れるなど、地域貢献活動も行っている。

【きっかけ】

新規就農前、養鶏業を営む福祉農場での実習を通じて、障がい者と農業の結びつきに感銘を受けたこと、新規就農時に知的障がい者を受け入れ、ともに働き生活する中で、仕事に張り合いが生まれ楽しいという感覚を持ったことが、障がい者雇用のきっかけとなっている。障がい者を、「ともに働く仲間」として雇用することが、現在の活動の原点となっている。

取り組みのポイント

○障がい者とともに生活し仕事をしながら、障がい者支援の方法を自ら形づくる。

○障がい者の通所の不便さを解消するために、グループホームを開設した。

○近隣農家の農作業支援、学生の職場見学の受け入れなどにより、地域貢献を行っている。

障がい者が担う仕事について

障がい者が担う仕事内容	仕事をする上での工夫点
・鶏舎の卵をバケツに取り、個数を帳簿に記載（1日4回） ・鶏舎の水替え（1日3回） ・鶏舎にバケツで餌を運ぶ（1日1回） ・鶏用の飼料を混ぜる（ほぼ毎日） ・豚舎にバケツで餌を運ぶ（1日1回） ・豚舎の糞などをスコップを使って集める（不定期） ・農場の環境整理（清掃など、不定期） ・近隣農家の収穫や草取り（依頼の都度） ・その他補助作業	・障がい者全員がノートを持ち、気が付いたこと、わからないことなどをメモし、問題を共有している。 ・作業の際、声だし確認、指差し確認を徹底し、事故やミスを防止している。 ・文書類は、振り仮名を振るなどして、わかりやすい表示に努めている。 ・朝礼、昼礼、夕礼以外にもミーティングの場を設け、報告・連絡・相談を徹底している。 ・旅行などの余暇活動を充実させ、仕事にメリハリをつけている。

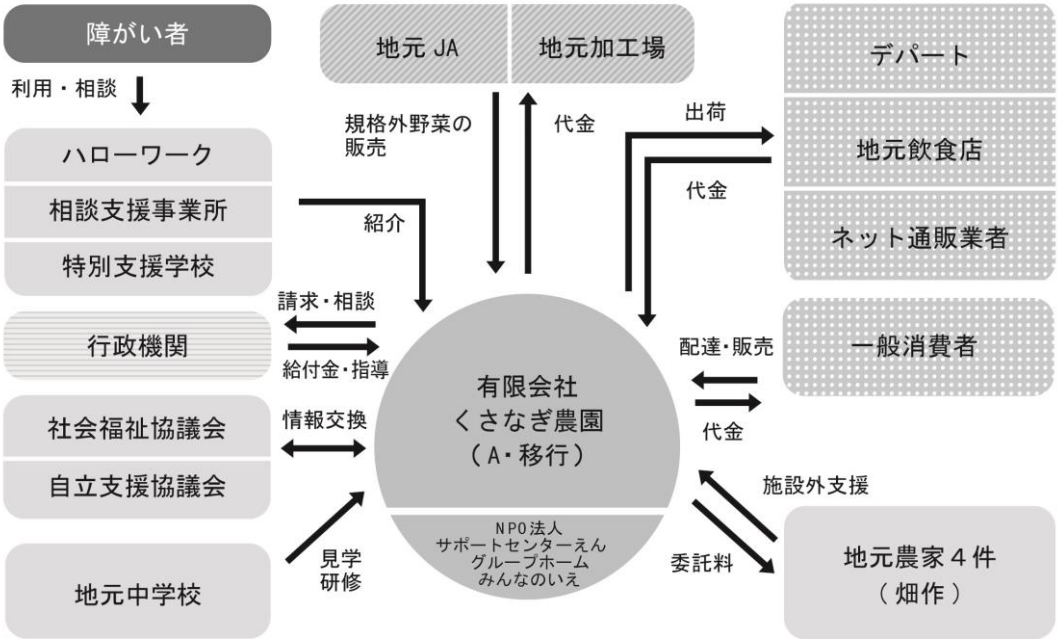
【作業の様子】

写真１　卵取り

写真２　豚舎の清掃

写真３　近隣農家での収穫

農業に従事したことによって見られた変化

障がい者：体力がつき、体が引き締まり、仕事に対する集中力がついた。
　　：近隣の農家で働くことで、社会常識やマナーが身に付き、コミュニケーション能力が高まった。
従業員：根気強く、我慢強くなり、話し方を工夫するようになった。
　　：農作業では毎日新たな発見があり、仕事の中に楽しみを見出すことができた。
経営面：人数が増えることで、一人で黙々と働くような場面がなくなり、職場がにぎやかで明るくなった。
　　：制度を利用して給付金を受けることで、従業員などの雇用の拡大を図ることができた。

事業スキーム